科目概要

地域づくり支援実習

北海道教育大学函館校　地域協働推進センター
センター長　齋　藤　征　人

1.実習の概要

地域づくり支援実習は、学生が観光や教育等に課題を抱える地域に一定期間（原則として10日間以上かつ90時間以上）滞在して、それらに関する就業体験を行うことによって、当該地域の振興に必要な実践的能力を育成する地域滞在型インターンシップです。

実習期間中は、実習担当者及び担当教員に毎朝前日の活動記録を報告（E-mailで送信）するとともに、担当教員による実習先への巡回指導を1回以上行っています。

実習先となる滞在・就業場所は、学生自身が適切な場所を選定し、条件を満たしていれば認定されますが、担当教員としても適切な実習先を提供できるように準備をしており、現在のところ全履修希望者が、教員側が提供した実習先に配属されて実習が行われています。この実習は、江差町役場まちづくり推進課内で行われた、いわゆる「えさし研修」が前身ですが、単位化に伴い、NPO法人ezorockの提案による北海道胆振東部地震の被災地における支援活動や、森町企画振興課の提案による移住・定住を切り口とした実施予定事業への企画立案などを実習内容に取り込みながら、現在に至っています。

2.厚真町での実習と履修者アンケートの結果

厚真町内での実習は、2019年5月から開始。実習指導をNPO法人ezorockが行い、実習先は厚真町教育委員会が提供する形が採られています。

実習当初は震災から半年と間もないこともあり、鹿柵の再建などを中心とした活動でしたが、同年8～9月の実習では放課後子どもセンターにおける放課後児童クラブ（学童保育）の活動支援が中心となりました。また2020年8～9月の実習では、滞在先であるしいたけ農家での収穫の手伝いを午前中に行い、午後は放課後児童クラブの活動支援というルーティンが定着しました。

履修した学生の参加動機は、厚真町が被災地ということもあり、過去の震災などで「当時自分は何もできなかった」との後悔から参加している者もおり、土砂災害の現場を見に行ったときの衝撃に心を痛めた実習生も少なくありません。放課後児童クラブの子どもたちとの関わりにおいても、震災の日が近づくにつれて当時の話をしたり不安を訴えたりする子どもに触れ、被災地の実情を知ることができたようです。

実習を通じて学生自身に起きた変化としては、自分とは違う考え方や捉え方をする人とも話してみたいと思えるようになったことや、視野が大きく広がったと振り返る学生が多いのが特徴的です。ある学生は、子どもたちと活動を共にしたことで「世の中には本当に色々な人がいて、その人一人ひとりによさがあると感じられるようになりました。厚真町に行ってからより一層、一つの物事をいろいろな視点から考えるようになると共に、否定しないで話すよう

に心がけるようになりました」と振り返り、この実習が被災地の支援に役に立っただけでなく、自分自身の成長に大きく影響していることがわかります。

3. 森町での実習と履修者アンケートの結果

森町内での実習は、2020年8月から開始。実習指導を森町企画振興課が行い、実習先は森町役場のほか町内の複数企業（グリーンピア大沼、株式会社ハルキなど）が提供する形が採られています。

地域に滞在した内容を情報発信するWebマガジンの制作や、森町の特産品と暮らしを情報発信する公式YouTubeの利用促進、地域に一定期間（1週間〜1か月程度）滞在し、実際の生活スタイルや気候風土などを体験してもらう、北海道体験移住「ちょっと暮らし」事業の企画立案など、多様な実習体験が魅力です。

履修した学生の参加動機は、企業や官庁系への就職を希望している学生のインターンシップとして、行政の仕事を学ぶことができるよい機会と捉えられているようでした。また「客観的にその町をみて、地域の課題や、特徴や魅力を探り、改善策を見出す力を身につけようと思った」という声からは、ソーシャルクリニックの考え方が学生に浸透しつつあることが感じられました。

実習を通じて学生自身に起きた変化としては、日常生活の中で原価や売価について考えるようになるなど、これまでは考えることがなかったことについて考えるようになったと振り返る学生が多いのが特徴的です。ある学生は、同じ実習に取り組んだ学生同士の共同生活について「心が休まることがなくて帰りたいと思ったこともあったものの、人として成長できた」と振り返り、周囲の協力者への感謝が聞かれました。馴染みのない地域に一定期間滞在し、仲間と共同生活することも、実はこの実習の大きな意義の一つであることがわかります。このことは、森町に限らず厚真町での実習でも同様のことがいえます。

4. 今後の課題

ここまで、被災地支援を通じて地域づくりを学んだり、移住・定住などに関する企画立案などを通じて地域づくりを学んだりと、年を重ねるごとに実習内容の充実が図られてきました。しかし、まちづくりと一口に言ってもまだまだ多様な切り口が考えられましょう。

また、ソーシャルクリニック巡回型サテライト・オフィスにおいても、本実習の取り組みについて紹介すると、訪問先の地域でも実習の受入れを検討したいとか、オンライン学習と現地での実習のハイブリッド方式での実習が検討できないかなど、活発な意見交換が行われており、地域からの期待も大きい教育コンテンツの一つになっています。加えて、コロナ禍においても、引き続き安定的に実習が実施できる方法や、対策のノウハウを蓄積していく必要もあるでしょう。

いずれにしても、今後ともコロナ禍での実習の在り方を検討しながら、地域づくりの切り口をさらに拡げるべく、地域の協力を得ながら、農業体験を通じて地域づくりを考えることや、地域おこし協力隊との交流など、多様なアプローチで地域づくり支援についての学びの機会の充実を図っていきたいと考えています。

企画力と探求心

国際協働グループ 3年 佐々木愛佳

地域に10日間密着し、そのなかで学びながら地域の今後について考えるということが初めてであり、大変でした。

得られた成果として自分自身で一番実感しているのは企画力です。私は企画ということに苦手意識があるほうで、実際今の就活の時期でよりそのことを実感していました。しかし、今回のこの実習のおかげで、こんな風に考えていくのかという過程を知ることができました。実習の内容からは、今まで大学内の講義などは観光目線で観光人口を増やすにはどうすればよいかと考えることが多かったですが、森町では移住者目線で、何があったら、どんなものに惹かれて移住したくなるか考える視点を身につけることができました。これを機に今後は、まちづくり、地方創生などにも関わっていきたいと考えています。

実習全体をとおして、地域で働く、学ぶには、地域のことをどんどん知っていかなくてはいけないと感じました。これからも探求心をもって地域と関わっていきたいと思います。